
リピートボタン

みゆ貴茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リピートボタン

【Nコード】

N0483F

【作者名】

みゆ貴茂

【あらすじ】

たぶんみんな一生懸命生きている。いろんなものに支えられながら。

翔ちゃん……。

優しかった、翔ちゃん……。

キラキラした笑顔でよくスキップをしていた翔ちゃん……。

時代遅れの流行歌が好きで、ところかまわず鼻歌を歌っていた翔ちゃん……。

中学三年生のとき、突然病気で死んでしまった翔ちゃん……。

大人になった私は疲れ果ててしまいました。

もう、あなたのところへいつてもいいでしょうか？

リピートボタン

私はペン縦にしているマグカップからカッターナイフを手取る。
ジリジリと刃を出した。

とても無機質な刃……。

空虚で、なんの力も込められていないような――。

でも、所詮人間の死なんかこんなもの。

あんなに輝いていて、生命そのものに思えた翔ちゃんでさえ、
あつけなく死んでいったのだから。

「ふう」

私は小さくため息をついて、無機質な刃を手首にあてがう。
痛いのかな……。

怖いけど……。

「……………」

……………」

……………」

……………」

「くう——」

力を込める。

刃が薄く肌にめり込む。

痛い。

うつすらと血が滲み出てきた。

このまま右手を引けば——。

「バカッ——！」

「えっ!？」

突然聞こえてきた怒鳴り声。

誰もいないはずの部屋なのに。

振り返ると、

「うそ……」

翔ちゃんが立ってた。

「なんで……?」

「お前がバカなことしようとするからだろ!」

翔ちゃんは怒ってる。

でも、私がとつくに失ってしまったものをしっかりと携えて立っている。

キラキラとした瞳で——生命そのものと思えた輝きで——私を見る。

「そんな……だけど、死んじゃって——」

「ああ、俺は死んだよ。でも、死んでからもずっとお前のこと見守ってたんだ」

翔ちゃんはそっぽを向いて口を尖らせる。

照れくさがつてるときの翔ちゃんの癖。

あの時のまま。

「夢の中だけど、お前の愚痴とかけっこう聞いてやってたりするんだぜ。憶えてないのか？」

「憶えて……ない……」

「まあ、いいけどさ。それは。ともかく、悪いことはいわん！自殺なんかやめとけ」

「……………」

私は俯く。

死んでる翔ちゃんのほうが生命で、
生きてる私のほうが死みたいだ。

「だって、もう疲れたんだもん。翔ちゃんとか……いきたかったんだもん」

「あんな。いいこと教えてやる。自殺しても俺には会えない」

「えっ？」

「死んでから世話になってる坊主に聞いたんだ。自殺して死んだやつってのは、大抵死んだときの痛みや苦しみを永久に繰り返してるって。魂になっても。もちろん、坊さんとかが供養して成仏できることもある。でも、なかなか難しいんだって。生きてるやつの協力がすごく必要だったりして」

「……………」

「だから安易に自殺なんてバカなことするな」

「バカなんて——翔ちゃんに言われる筋合いはないよ！」

私は思わず怒鳴ってしまう。

「子供の頃に死んじゃった翔ちゃんに私の気持ちなんてわかるはずないよ！」

酷いことを口走ってしまう。

「大人になって生きるの………生き続けるのって——ほんと、しんどいんだよ！？」

翔ちゃんが申し訳なさそうに目を伏せる。

涙が止まらない。

鼻水も。

私、今きつと酷い顔をしている。

私は力が抜けてしゃがみ込んでしまった。

「毎日、毎日——うんざりするくらい、人が詰まった電車で押しつぶされそうになりながら会社について。痴漢されても文句も言えないし。」

会社では一生懸命がんばってるのに、怒られてばかり。

同僚には素敵な彼がいて、友達は次々に結婚していく。

でも、私が好きになる人は、大抵みんな誰かのもの。

不倫だつてした。でも、結局遊びだつたんだつて捨てられて終わり。なのに親は結婚しろ結婚しろつてうるさいし。

もう、いい加減……休ませてよ——」

こういうとき、いつも考えてしまう。

翔ちゃんが生きててくれたらつて。

そしたら私、こんなに惨めじゃなかったはずだつて。

なんで死んじやつたのよ、翔ちゃん。

「知ってるよ。ずっと見守ってきたから」

「……………」

翔ちゃんが私の頭を撫でてくる。

子供のときのままの小さな手のひらで。

「ごめんな。力になってあげなくて」

「……………」

「確かに生き続けるって厳しいみたいだな。子供のまま天命をまっとうできた俺のほうが、幸せだったのかもしれない」

「翔ちゃん……」

「それでも、俺はお前に生はきててほしんだ。俺の分まで」

翔ちゃんが私をぎゅっと抱きしめる。

温もりのない抱擁。

それでも私は確かに翔ちゃんに包まれている。

「いつか生きててよかったつて笑えるその日まで——ちゃんと見

守っているから」

「翔ちゃん」

「だから、今は——」

朝、目が覚めるとCDコンポから徳永の歌う『時代』が静かに流れていた。

手にはカッターナイフが握られている。

そうだ。

リピートボタンを押して、ずっとこの歌を聞いてたんだって。いつの間にか眠ってしまってた。

翔ちゃんがよく鼻歌を歌っていた歌。

けしてお世辞にも上手とは言えないけれど、でも翔ちゃんの優しさがそこにあつた。

何でそんな古臭い歌、歌ってんの？って訊ねると、

『いいだろ？好きなんだから』って口を尖らせてから笑ってた。

「翔ちゃん……もう少しがんばってみる——」

私はカーターナイフを放り投げた。

数日後、会社の帰りに本屋に立ち寄ってみると、有線から中島み

ゆきの歌う『時代』が流れてきた。

そういえば、『昭和』のコンピレーション・アルバムがでたか
いってたっけ。

徳永のは持ってたけど、中島みゆきのは持ってなかった。

私は歌に誘われるようにCDコーナーへ足を運ぶ。

あった。運良く一枚だけ。

私とそのCDに手を伸ばすと、そのCDを求める別の手が私の手
に触れる。

「あっすいません」

手はすぐに引つ込められて、男性の声が謝罪してくる。

私が顔をあげると、

「一枚しか残ってないすね。まいったなあ」

若い男の人が困ったように笑っていた。

数年後、私はこの人と結婚した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0483f/>

リポートボタン

2010年10月10日06時24分発行